高性能、信頼感、デザインの自由さが木製サッシュ採用の理由。

ムク木材の住宅を手掛ける建築家青木和壽氏が木製サッシュを使うのは、見た目の意匠的な理由だけではない。施主の満足度が物語る高性能や信頼性、個別対応によるデザインの自由度の高さも看過できないポイントだ。青木氏に、輸入木製サッシュの老舗マーヴィン ウインドーズについて伺う。

屋根下に三角形のサイドライトを設けた木軸組工法の住宅(上)。「北アルプスを望む家」。木製のハイサッシュによる大開口(中)。「北アルプスを望む家」の和室。障子と木製ハイサッシュが美しく調和する(下)

「私の仕事は個人住宅がメーンですから、施主の評価はダイレクトに伝わってきます。木製サッシュの暮らしを実際に体験された方は、これ以外の選択肢は考えられないと言う方が多い。施主の満足度は非常に高いですね」

和建築設計事務所を主宰する青木和壽氏は、2000年に故郷の長野県塩尻市に事務所を移し、構造や工法に拘泥せず、信州でムクの木材を使った上質な木造住宅を数多く手掛けてきた。近年は地元長野県産材の販路拡大に腐心し、自身も地元の良質な材を顧客に勧めることが多い。「内部空間に構造材や内装材としてムク木材を取り入れた設計をしているため、壁面に木以外の素材が見えると違和感がある。特に開口部周辺に質感も色合いも異なる素材が見えると、内部空間のまとまりがなくなってしまいます。そのため私の設計では木製サッシュを仕様としています」

高い断熱性能で選ぶ木製サッシュ

青木氏が設計する住宅のユニークなポイントは、窓が大きなことだろう。通常の住宅の2～2.5倍は開口部面積が大きいという。2階の空間を吹き抜けにして三角形のはめ殺し窓を屋根の下に設けるのも特長だ。「ここに開口部があることで開放感が違う」と青木氏は言う。氏の建築で使われているサッシュの多くは、マーヴィン ウインドーズの製品だ。

「マーヴィン社の窓枠材の質感と色合いは和室空間でも取り入れることが可能です。何より信州は冬の寒さが厳しいので、冬場が勝負の家づくりを考えなければならない。開口部の気密性や断熱性など性能も重要なのですが、残念ながら国産のサッシュでは性能が十分ではなく、北米の木製サッシュの性能には適わないと思います」

輸入木製サッシュについて造詣が深い青木氏が、なぜ他社製ではなくマーヴィン社製を採用するのだろうか。

デザインの自由度が高く、選択肢も広い

「一つは対応の素晴らしさ。顧客に対するアフターケアはもちろん、設計者としては、国内にアメリカ本国と同等の対応ができる窓口があることが大きいです。デザイナーと技術者として対話できるし、逆にディテールや収まりなど、デザイン的なアドバイスをもらえることもあります。国内のサッシュメーカーはメーカー側からの与条件が少なくありませんが、マーヴィン社は、個別対応が基本なのでデザインの自由度が非常に高いのも魅力です」

青木氏は見学や打ち合わせのため、アメリカの工場にも何度か足を運んでいるが、そこで働く人々のプライドには目を見張るものがあると言う。

「性能実験のために実際に原寸大のサンプルをつくり、“現物”でさまざまな検証を行っていた。これが製品の信頼度につながっているのでしょう。もともと樹種、カラー、意匠のバリエーションは豊富で、設計者としても使いやすいサッシュでした。和室に合う白木もあります。近年は金物の選択肢も広がり、ヨーロピアンデザインの金物もセレクトできるようになった。日本ではあまり知られていない高性能なモデルも多く、ハリケーン被害対策で開発された高強度の窓『ストームプラス』は、日本の台風被害の多い地域の住宅にも適っていると思います」

信頼感、高性能、デザインの自由度の高さが、マーヴィン ウインドーズが選ばれる理由と言っていい。

青木 和壽（あおき・かずとし）
和建築設計事務所代表取締役。1963年長野県生まれ。工学院大学工学部建築学科卒業。一色建築設計事務所勤務を経て、1999年に東京に和建築設計事務所を設立。設計グループ「アーキテクツデスク」結成。2000年、長野県塩尻市に事務所移転。特定非営利活動法人 前田木藝工房三城シューレ専務理事。信州の木活用住宅普及対策研究会にも参画。http://www.kazu-design.co.jp/